

関西支部だより

関西支部活動報告 第4号

発行 2009年6月

編集 財がんの子供を守る会
関西支部

のぞみトークきんき2008

2008年7月21日(月/祝) グランキューブ大阪

兵庫県立がんセンター放射線治療科部長 副島俊典先生に『最新の放射線治療について』をテーマに講演していただきました。

放射線治療はマスコミに取り上げられることも多く、たくさんのカタカナの用語を見聞きします。ですが先生のお話を聞いて、基本的には放射線でDNAを傷つけることで、がん細胞を死滅させようという、ひとつの方法であることがわかりました。近年の放射線治療は、合併症を少なくするために、より正常組織に与える影響を減らす工夫がなされてきたそうです。通常2方向から当てるところを、多方向から当てるようにしたり、腫瘍の形に合わせて、腫瘍のある部分には多く、正常組織には少ない線量が当たるように細かく計算、設定するなどです。そのための機器が新しく考案され、その機器の名前がマスコミに取り上げられているようです。

また、粒子線治療は通常X線に反応が良くない骨肉腫や悪性黒色腫に効果があるという報告があるものの、まだ始まったばかりの治療のため、2次がんなど将来への影響についてのデータがまだまだ少ないそうです。そのため現時点では、小児への適応は慎重にならざるをえないのが現状なようです。

講演の最後に先生は、日本には小児専門の放射線治療医や、正しい量の放射線治療が入っているかチェックする医学物理士が少ないことにも触れられました。子供たちが安全に治療を受けられる環境になることを願わずにはられません。



こすもす

2008年11月29日(土)に第27回、2009年3月28日(土)に第28回の<こすもす>子供を亡くした母親の集いがエルおおさかで開かれました。司会・進行を宮崎清恵先生(神戸学院大学総合リハビリテーション学部社会リハビリテーション学科教授)にお願いしました。

11月は10名が参加し、そのうち3名の方が子供さんを亡くして間もない方でした。3月参加の9名は、全員何度か参加していただいている方ばかりでした。

亡くされて間もない方は、やっとの思いで会場まで来たこと、この言葉で言い尽くせない苦しい思いを何とかしたい、誰かにわかってもらいたい、でもわかってもらえない、思い切り泣きたいけどなく場所がない、自分がどうにかなってしまいそう、何故自分が生きていて子供が死ななければならなかったのか、死にたいけれど家族のために死ねない…など、胸の奥深くに抱え込んで閉じ込めていた思いを、少しずつですが話してくださいました。

この2回の<こすもす>を通じて参加者全員の共有できた思いは、<こすもす>に来ると「子供を亡くした」という同じ立場だけで「私の気持ちをわかってもらえる、少しでも自分の心を開放できる」ということでした。何度か参加されている方も「悲しみは薄れていくものではなく、形を変えていくもの」「子供を亡くしたという現実、自分が死ぬまで背負っていかなければならないこと」「年月が過ぎて、日々の生活を笑って楽しんでいる自分に、ある日ハッと気づき悲しくなったこと」「もう大丈夫、立ち直ったということは決してないこと」「年月が経って、やっとな泣けるようになったこと」など話をされていました。

途中で休憩もかねてお茶とケーキを食べながら話がはずみました。宮崎先生には毎回お世話になっていますが、私たち当事者から少し離れた立場で助言や指摘をしていただき、私たちにとって良きアドバイザーとして心の支えとなってくださっています。会の終わりに「又お会いできたらいいですね」とお互いに声かけをして閉会しました。皆さん名残惜しそうでした。次回の参加を心よりお待ちしております。

(J. Y)

がんばれ!!阪神タイガース

夏休みお楽しみ企画として、2008年8月5日(火)京セラドームでの阪神 VS 広島戦に19家族52名の皆さんをご招待しました。

残念ながら試合は負けてしまいましたが、楽しい夜を過ごすことができました。私も大きな声を出して、日頃のストレスを発散することができました(笑) また皆さんに喜んでいただけるような企画を考えていきたいと思っています。



第31回近畿小児がん研究会 2009年3月14日(土) 大阪市立総合医療センターさくらホール

近畿小児がん研究会公開シンポジウム「思春期のがん患者への心理的サポート」が開催されました。

大阪市立大学医学部附属病院の山口悦子先生が、思春期の特徴として自立を望んだり、孤独になりたがるのに反し、親や学校が庇護的であったり、病院では常に医療者がいるため独りになりにくいなどの療養環境の現状と問題点をお話されました。先生の病院では、身近な年長者の役割をする学生ボランティアを受け入れたり、将来に向けて職業体験を増やす意味で「検査技師とは?」といった話や、施設見学をしているとのことでした。

大阪大学医学部附属病院の臨床心理士である吉津紀久子先生は、命や家族に対する考え方が同級生と違うと感じると言う思春期の患児は多く、そのため友人関係を再構築しなければならなくなったり、ある日突然病気を抱えた自分と向き合わなければいけない出来事が起こるといった、心の危機を乗り越えるためには、「何が起こったか理解する力」と「感情のコントロール」が必要になるとお話されていました。

また当事者として高橋晶子さんが、親の立場から佐々木由紀子さんがお話くださいました。

世話人のつぶやき ♪ふらんつ・よーぜふ・はいどん♪

先日、クラシックのコンサートで、ハイドン(1732-1809)のトランペット協奏曲を聴いた。今年ハイドンが亡くなってから200年だそうだ。周年と言えば3年前のモーツァルト(1756-1791)生誕250周年記念はクラシック音楽界が大騒ぎだったのを思い出す。コンサートやCDばかりでなく、書物も数多く出版された。

ハイドン没後200年がモーツァルト生誕250年ほど大騒ぎにならないように、現代の人々の人気としては、夭逝の天才にして神童たるモーツァルトに比べて、ハイドンはいささか分が悪い。確かにモーツァルトの音楽は、ただ美しく、やさしいだけでなく、何か明るい悲しみを含んでいて、その短くともエピソードに事欠かない人生と相俟って私たちの心に届く。一方、ハイドンの音楽は単純で、一見(じゃなくて「一聴」かな?)深みが無いようにさえ思える。でも聴いていて、そして聴き終えて、とても幸せな気分になれる。そう、このハイドンという人は、本当に音楽が好きで、音楽を楽しんでいる。そして自らの楽しみが聴き手にも伝わって皆が肩肘張らずに楽しんでいるということに一点の疑いも持っていない。このことは実際にハイドンの音楽を聴いてもらって、そして一緒に楽しんでもらう他には伝えようが無い。周年企画便乗の書物が少ない所以である。

当時としてはかなりの長生きだったハイドンと後から生まれて人生を駆け抜けてしまったモーツァルト、この世での命の長さは倍以上違うのだが、どちらも自分の生を生き抜いて、生き切った人であることをしみじみと感じて、等しく尊敬の念を抱く。

そして、親バカが一言申し添えるのだが、6年間で私を追い越して逝った私の娘もまた、常に前を向いて自分の人生を生き抜いて生き切ったのだと思っている。(T. U)